

第 1737 回 (12 月 9 日)

農村女性の生活記録

石 原 豊 美

日本の農村女性に関して社会的な関心が向けられたのは、大雑把に捉えれば次の二つの側面においてであろう。すなわち、一つには、労働組織としての性格の濃厚な家の重圧の下にあって解放されるべき存在としてであり、もう一つには、男性労働力の兼業化が進展し、(高齢者と並んで)農業上の役割の相対的な重要性が見直されることになったという时期的な文脈においてである。女性が担いがちな荷重負担からの解放が、課題とされてきた。

しかし、農村は都市(へ排出する)人口の産出母胎であり、食料生産の主体でもある。また、最近では農村は、守られるべき自然環境の保有空間や犯罪防止などの社会的な安定化機能を保有する場として評価されている。こうした中で生活圏を形成している農村女性の、関心領域や生活価値観の特徴はどのようなものであろうか。

報告では日本農業新聞の投稿欄に掲載された女性たちからの投稿文をデータとして用い、4か時点を取り上げてこれの分析を行った。取り上げた4か時点は、それぞれ次の通りである。すなわち、Ⅰ期(掲載文数126)は昭和42年7月～43年6月で、コラムが設けられた最初の1年であり、農業基本法制定の約6年後にあたる。Ⅱ期(掲載文数290)は昭和55年7月～56年6月であり、国際婦人年とそれに続く国連婦人の10年の中に位置づけられる。Ⅲ期(掲載文数352)は平成2年7月～3年6月で、農林水産省婦人・生活課が主導して「農山漁村の女性に関する中長期ビジョン懇談会」が組織された時期である。Ⅳ期(掲載文数348)は平成7年7月～8年6月であり、開発援助の文脈においてジェンダーと開発(Gender and Development)の考え

方が取り込まれた時期とする。

投稿者は関東・東山地方に集中しており、Ⅰ期には30代が最も多かったが、Ⅱ期には40代が、Ⅲ期とⅣ期には60代が最も多くなっている。主題としては、Ⅰ～Ⅳ期を通じて家族が最も多く扱われており、農業が次が多い。それに続いて多いのが、Ⅰ期では生活史、Ⅱ期とⅢ期では学習、Ⅳ期では余暇である。

掲載文の中には、反響文群を伴う投稿文がいくつか見受けられる。家族に関するものが多く、次の6つの文群が着目される。すなわち、文群1＝嫁の家族内の現状についての訴えとそれへの意見、文群2＝多世代同居の家族関係を円滑に保つための秘訣と生計の世代的な独立に関する意見を含むいくつかの実態、文群3＝嫁いびりに悩まされる女性からの訴えとこれに関する意見や実態、文群4＝長男夫婦との同居に伴う気苦労の訴えと、話し合いや財布の譲渡を勧めた意見、文群5＝義親の死亡時に嫁はしばしば相続を受ける法的裏づけをもたず、次世代の嫁の養子縁組が望まれる旨の意見、文群6＝産後の静養を婚家と実家のどちらでするかをめぐる疑問やいくつかの考え方である。

検討の対象としたⅠ～Ⅳ期に、日本で農家は2割台から1割未満に減少し、またⅠ期からⅡ期までの間に兼業化が進展して農家の所得は6倍以上に増加している。しかし、女性たちは、農家の社会的な意義を主張しても限られた存在としての女性農業者であることの自負を表出しても経済的な水準の向上を喜んで報告してもいいない。個人がおかれた小さな環境の中での記述や問題提起がなされていた。